

静岡県西部地域の露地ネギに発生するネギアザミウマの 薬剤感受性

○土井誠・土田祐大・片井祐介・多々良明夫(静岡農林研)

1 背景と目的

静岡県内では、ネギをはじめとするネギ属作物でネギアザミウマが大きな問題となり、土着天敵を活用した防除体系が求められている。現在、露地シロネギを対象にネギアザミウマの有力な土着天敵と考えられるヒメオオメカメムシやクモ類について、植生管理(ムギ間作)や選択制農薬の使用による保護、活用を検討している。これまで天敵に対する農薬の影響について、ヒメオオメカメムシに対して影響が少なく防除体系への導入が可能と考えられる薬剤を明らかにしてきた(土田ら,2012)。また、クモ類についてもこれまでの報告(浜村ら,2006)を参考にほ場での影響を調査中である。今回は、これら天敵と組合せ可能で、ネギアザミウマに対して効果が高い剤を明らかにするため感受性検定を行ったので報告する。

2 方法

検定には、以下の3個体群の雌成虫を供試した。①農林技術研究所個体群(所内露地ほ場、シロネギ、2012年9月、10月)、②磐田市個体群(生産者ほ場、シロネギ、2012年9月)、③静岡県浜松市(生産者ほ場、シロネギ、2013年1月)。研究所個体群は、採集した個体をそのまま、残りの2個体群は採集後ネギで飼育した後代を検定に用いた。

薬剤は、15剤(オルトラン水和剤、アグロスリン乳剤、ランネート45DF、オンコルMC、アドマイヤーフロアブル、アルバリン顆粒水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、アクタラ顆粒水溶剤、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC×5,000、アフーム乳剤、コテツフロアブル、ハチハチ乳剤、プレオフロアブル)を常用濃度に希釈して供試し、インゲン葉片浸漬法により調査(25℃、16L:8D、48時間後)した。

3 結果及び考察

3個体群ともに補正死亡率が100%であった薬剤は、スピノエースとディアナの2剤、同95%以上の剤は、オルトラン、アドマイヤーの2剤、同80%以上は、オンコル、モスピラン、プレオであった。全国的にネギアザミウマの被害が問題となり始めた2002年に県内のシロネギ採集個体群で実施した検定(平成15年度静岡県病害虫防除所年報)と比較すると、アグロスリンとランネートは感受性が大きく低下していた。また、2007年に採集した個体群ではコテツに対する感受性が高かったが(薄膜法による)(多々良ら,2010)、今回の結果では補正死亡率は17~54%であった。

今回のネギアザミウマに対する薬剤感受性の結果と天敵影響の知見から、今後、ほ場で体系的に使用可能な薬剤を検証して選抜していく予定である。